

## 文芸資料研究所蔵『源氏カルタ』について

—源氏物語における〈一帖一首一図〉資料との関係を中心に—

上野英子

### 一 「源氏カルタ」の概容と問題の所在

我が国に於ける最古のカルタ記録として知られているのが、慶長二年（一五九七）三月朔日に発令された『長曾我部元親式目』の「一、博奕 カルタ 諸勝負令停止」〔注〕という布告である。これは、朝鮮半島へ出陣するため豊臣秀吉によって招集された全国諸大名の軍勢が、肥前国名護屋に在留していたときに発令されたカルタ禁止令であり、カルタが慶長頃には日本に存在し、かつ賭け事の具として用いられていたことが窺われる資料でもある。因みに、大阪芦屋市にある滴翠美術館には、当時のもの（一六世紀末）とみられる日本最古のカルタ（「天正カルタ」と称される）が僅かに一枚保存されている。札の表は洋風の人物画を木版刷りし手彩色したもので、どうやらカルタというものは古くより絵を伴うものであったらしい。そして裏には「三池住貞次」〔注〕と刷られている。「貞次」は制作者名、「三

池」は地名で筑紫国三池（現、大牟田市）のことらしく、これを承けて現在同市には（日本カルタ発祥の地）を記念して、三池カルタ記念館が設立されている。

さて、元親の発令から約四〇年後、寛永一五年（一六三八）の序文をもつ『毛吹草』になると、諸国の名物を国別に記した中の「山城」の項に「坊門賀留多カクタ鹿相カクタ物也カクタ 金賀留多キンカクタ 歌賀留多ウタカクタ」とあり、「筑後」の項にも「三池賀留多ミイカクタ」注3という記事がでてくる。この頃になると京都山城国でも「坊門カルタ」や「金カルタ」などさまざまな種類のカルタが作られていたらしく、その中に「歌賀留多（うたかるた）」と呼ばれるものも存在していたことが分る。

更に貞享元年（一六八四）序の『雍州府志』によれば

賀留多 六條坊門製之。其良者称三池。以金銀箔飾之者、謂箔賀留多。是於繪草子屋造之。元阿蘭陀人玩之。長崎港土人效之、為戯。（注4）

という記事があり、これによってカルタの多くは京都の六条坊門あたりで製造されるようになっていたこと。それでも高品質のものは、発祥地の名を取ってであろう「三池（カルタ）」と呼ばれていたこと。金銀箔飾りの豪華なカルタは「箔カルタ」と呼ばれていたこと。カルタが絵を伴うものであったためか、絵草子屋がこれを作っていたこと等が窺われるようである。同書はまた、カルタはもともと阿蘭陀人の遊び道具で、長崎から伝わったとも述べているが、さらに歌カルタの遊び方についても、

賀留多札百枚、半五十札書古歌一首之上句、圍並床上、中央隙地、是謂地。又半五十枚、書上歌之下句、是謂出、前所謂中央隙地、出置所應手之下句一枚、圍座人各視之、所在床上之上句、與今所出置之下句、有相合者、則取之。然後其所合取之札筭多者為勝、筭少者為負、是称歌賀留多。元出自貝合之戯者也。

と述べている。すなわち、百首の歌の上の句を書いた五十枚の札を、中央に隙間（地）を残して、床の上に並べ

る。下の句を書いた五十枚の札（出札）は重ねて「地」に置き、これを一枚ずつめくって、その出札に合わせて、上の句の札を選び取り、正確に取った札数の多さで勝敗を決めるといふもので、もともとは貝合せから出た遊びだといふのである。

これに対して延宝六年（一六七八）に刊行された『色道大鏡』（巻七）になると、今度は逆に上の句を出し札、下の句を取り札とする遊び方を紹介している。

当時傾国のとるは、貝おほひのごとくに残らずならべ置て、歌の上の句を一枚づゝ出し歌に合てるときは露松といふ。又常のかるたのごとくに歌のかるたを下にかくして三枚づゝまきならべ、扱一枚づゝうち出し歌のあひたる数のおほきかたを勝とさだむるをうたがるたといふ。されどもかるたのごとくにうちあふ事今はたえて、貝おほひのごとくにのみもてあそびきたれり。此うたがるたに百人一首のうたならではもちいざるやうにおもはれておかしくこそ侍れ。（注5）

これによれば、傾城たちは下の句の札を残らず床に並べ置き、上の句の札を一枚ずつ取り出し、並べてあつた下の句と見比べて、「露松」と声をかけて合わせたようである。また歌カルタを通常のカルタのように打ち合う遊びは以前こそ見られたが、今では専ら貝覆いのような遊び方が主流となつていたこと、歌カルタといへば『百人一首』でなければおさまらないような気運まで醸成されていたとも伝えている。

一方、歌カルタは次のような川柳にも登場する。

二三首に 成りて気をもつ 歌がるた

元禄期（一六八八—一七〇三）

きりぎりす 泣とおさへる 歌がるた

享保期（一七一六—一七三五）

歌かるたにも 美しい意地があり

宝暦九年（一七五九）

歌がるた 手ひどく乳母は いぢめられ

同一二年（一七六二）（注6）

一句目は、取り札がとうとう残り二、三枚となつてしまい、あまり無惨な負け方だけはしたくないと気を取り直し、残りの札を睨んでいる様子を詠んだものだろう。二句目は、『百人一首』の「きりぎりす鳴くや霜夜の…」の札が読み上げられると、達者たちはこの「鳴く」のあたりで取り札を押さえたという意味か。三句目は雅びな遊戯であるものの、そこは勝ち負けのはっきりしたゲームのこと、美しく着飾った取り手たちの胸々にも秘めた負けじ魂があると風刺したもの、四句目はあまり教養の無い乳母が、お嬢さんたちのカルタ遊びに無理矢理つきあわされ、散々な目に遭っている情景を皮肉つたものだろうか。

このようにみてくると、歌カルタが寛永十五年以前には既に存在していたこと、なかでも百人一首カルタは川柳に詠まれるまで流行していたこと等がおさえられそうである。では源氏カルタはどうであろうか。天保九年（一八三八）八月橘守部序をもつ、黒沢翁満の『源氏百人一首』のなかにその記述がある。同書は『小倉百人一首』に倣つて源氏物語の大意をさとらしめんとした所謂源氏物語の啓蒙書であり、具体的には、源氏物語の登場人物から百二十三人を選び、一人一首ずつ彼らの詠んだ歌とそれぞれの小伝と似顔絵をまとめた作品だが、そのなかで黒沢は、カルタが如何に『小倉百人一首』の隆盛に貢献したかを述べるとともに、源氏カルタについても次のように言及している。

…かるたといふ物をさへ調じ出て、春の日暮しもてあそび物となれるからに、弥益行はれて、老若男女ともに歌といへば百人一首と誰知ぬ者もなく、山の奥島のはて迄も行渡れる也。其後は是に習ひて何の歌がるた、（ママ）く、れの歌がるたとやらに追々に調じ出たる、或は伊勢物語或は古今集などを始て、則源氏も源氏がるたと

て世にあるは、五十四帖の巻名の歌どもをかるたになせる物也、されど是は唯僅の歌をしる而已にて、物語中の人名を知便にだにならず。増て其おもむきの片端をも伺ひ知べき物にはあらず。且此類のかるたどもは、世に弘

く上下おしなべたるもてあそび物にあらざ。さる物有とだに知人まれ也。  
要点をまとめると、

(1) 百人一首カルタの流行に触発されて、『伊勢物語』や『古今和歌集』など様々な歌カルタが制作され、源氏カルタも生まれたこと

(2) それは巻名の由来となった歌五十四首をのせたカルタだったこと

(3) しかしその存在を知る人は稀であったこと

となるだろう。(3)は、換言するならば、源氏の大意を悟らしめる道具として見た場合、源氏カルタは百人一首カルタのようにうまく機能しなかったということなのだろうが、その理由として、黒沢は次のように続けている。

然行はれざる事の本を考るに、是其始に絵を加へたる一卷の世に行はる、物なければぞかし。兼て目馴れざれば、たま／＼かるたに向ひても取事あたはず。取事あたはざれば倦て楽しからざる故に、自行はれ難き也けり。

よて今は源氏物語中なる人々の歌どもを、一人に一首づゝあげて、傍に其詠人の小伝をしるし、歌の注解をなし、尽く絵を加へて、ひたすらかの小倉百人一首に習へる物也……(注1)

これをまとめると、

(a) 源氏カルタには詠者名が記されていなかったため、誰が詠んだ歌かも判らず、歌を通じて物語の趣きをうかがい知る手だてとならなかったこと

(b) もともと源氏カルタは(古典文学の教養を要求されるためか)、世の中の上下すべてに受け入れられるものではなかったこと

(c) 「絵を加へたる(源氏の)一卷」が世の中に流布するということが無かったために(カルタの絵も)目に慣

れなかつたこと

の三つの原因を挙げたようである。(C)の記述はいささか難解だが、黒沢の時代に源氏物語の絵が無かつたということとはありえないから、登場人物を描いた人物画資料が無かつたという意味に解釈しておきたい。そのため、折角歌に添えられた絵も(詠者図ではなく場面絵であつたため)、『百人一首』とは違つて札をとるヒントにはなり得なかつたことを指しているのではなからうか。だからこそ黒沢は百人一首カルタのような、歌と詠者絵とを組み合わせた企画を創案したと解されるからである。

ともあれこの記述によつて、源氏カルタが少なくとも天保九年(一八三八)頃までには出現してゐたことが確認できよう。百人一首カルタが(一人一首一図)を原則とするなら、源氏カルタの方は当然(一帖一首一図)が大原則となつたことだろうが、では各帖から唯一選ばれたというその歌や図は、一体何を基準に選ばれてゐたのだろうか。

歌についていえば、黒沢翁満が「巻名の歌どもをかるたになせる物なり」と証言してゐるように、おそらくは古注釈が指摘してきたところの、巻名の由来となつた歌をさしてゐるのだろう。しかしながらことはそう簡単ではない。源氏物語五十四帖のすべてが、そうした巻名の由来歌をもつてゐるわけではないからである。なかには(桐壺)〔紅葉賀〕のように、詞によつて巻名が決まつたとされる帖や、(夢の浮橋)のように、歌にも詞にも依らずに付けられたとする帖もあり、結局のところ由来歌なるものをもつ巻は、四十三帖しかないからである。しかもそうした由来歌をもつ帖の中でも、(簾木)〔須磨〕のように、由来歌が複数指摘されている帖もある。そもそも由来歌の特定はいつ頃から行われ、いつ頃に固定化したのだろうか。そして由来歌の無い帖の場合にはどのような歌が、その帖を代表する歌として選ばれたのだろうか。絵についても然り。源氏カルタの絵は選出された歌と一致するのか、つまり物語においてその(選出歌)が詠まれた場面を、絵は忠実に反映してゐるのだろうか。それとも如何せん小さな札のこと、詳細

な場面絵は描かれることなく各巻を象徴する景物だけが描かれて、歌との直接的な関係は薄らいでゆくのだろうか。以上のような問題意識をもとに、本稿ではまず文芸資料研究所蔵『源氏カルタ』について、その選出歌を分析し、次に〈一帖一首一図〉の源氏資料における位相を探って行きたいと思う。

なお本稿では、源氏物語の巻名の由来となった歌を〈由来歌〉と仮称しておく。こうした歌を〈巻名歌〉と呼ぶ資料もあるが、その一方で「詠源氏物語巻名歌」（東大寺図書館蔵）「源氏物語巻名歌」（国立国会図書館蔵）のように、源氏の巻名を詠み込んだ新作歌のことを「巻名歌」と呼んだ例もあり（「光源氏巻名歌」として知られる藤原定家作とされる五十四首の巻名歌などは特に有名だろう）、混同を避けるためである。

## 二 実践女子大学文芸資料研究所蔵『源氏カルタ』書誌・翻刻・本文の系統

### ■書誌

木箱入り（漆塗り・焦茶色紐付き）。絵入り源氏カルタ百八枚揃（一帖一首一図の歌カルタで、五十四首の歌をそれぞれ上の句と下句に分けて二枚一組としたもの）。

札の寸法はおよそ、竪八、四×横五、五糎。各札とも卵色地に金泥霞流しを施した料紙を使用。裏面は銀箔地。この銀箔は札の表面の四周縁取りも兼ねている。

上の句の札に〈巻名〉〈上の句〉〈絵〉を記し、下の句の札に〈下の句〉を記す。詠者名は入れない。絵は極彩色。ところどころ金銀泥等も用い、衣装の文様、草花の描写も細かい。人物画は狩衣姿の貴公子図が多く、六等身くらいのおすっきりした描き方である。歌はこれらの絵を描いた後に書き入れられたのだろう。細いがメリハリのある流麗な

筆で、絵を回避しての散らし書きである。絵と歌の担当者が同一人物であったか否かは不明だが、それぞれに、全札一筆。江戸後期ごろの制作か。

本書は玉英堂書店より貴重書刊行会に入り、平成十七年に本学に移った。それ以前の旧蔵者印や極め等、由来を示す手掛りはない。

### ■歌の翻刻

(注) 各行冒頭の数字は私に施した通し番号、太字部分は該書の独自異文である。

- 1 桐壺 いときなきはつもとゆひになかきよにちきるこゝろはむすひこめはや
- 2 は、木、 数ならぬふせやにおふるなのうさにあるにもあらずきゆるは、き、
- 3 うつせみ うつせみの身をかへてけり木のもとになを人からのなつかしきかな
- 4 夕かお よりてこそそれかとも見めたそかれにほの／＼見ゆる花の夕かほ
- 5 若むらさき 手につみていつしかも見んむらさきのねにかよひける野辺の若草
- 6 末つむ花 なつかしきいろともなしになに、このすゑつむ花を袖にふれけん
- 7 紅葉の賀 物思ふにたちまふへくもあらぬ身の袖うちふりしこゝろしりきや
- 8 花のえん いつれそと露のやとりをわかむらにこさゝかはらに風もこそふけ
- 9 あふひ はかりなき千尋の底をみるふさのおひゆくすゑはわれのみそ見ん
- 10 さかき 神かきにするしの杉もなきものをいかにまかへておれる榊ぞ
- 11 花ちる里 たちはなの香をなつかしみほとゝさす花ちるさとに尋てそとふ

- 12 すま うきめかるいせおのあまをおもひやれもしほたるてふすまのうらにて
- 13 明石 秋の夜のつきけのこまよわかこふる雲井をかけれ時のまもみん
- 14 みをつくし かすならてなにはのこともかひなきになにみをつくし思ひ初けん
- 15 よもきふ たつねてもわれこそとはめ道もなくふかきよもきのもとのこゝろを
- 16 せきや あふさかのせきやいかなる関なれはしけきなけきの中をわくらん
- 17 絵合 うきめみしそのおりよりもけふはまた過にしかたにかへるなみたか
- 18 松風 身をかへてひとりかへれるふるさとにきゝしににたる松風そふく
- 19 うす雲 入日さす峯にたなひくうす雲はもの思ふ袖に色やまかへる
- 20 朝かほ 見しおりの露忘れぬあさかほの花のさかりは過やしぬらむ
- 21 乙女 をとめ子か神さひぬらしあまつ袖ふるきよのともよはひ過ぬれは
- 22 玉かつら こひわたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちを尋きつらし
- 23 はつ音 年月を松にひかれてふる人にけふ驚のはつねきかせよ
- 24 こてふ 花そのゝこてふをさへやした草に秋まつむしはうとくみるらん
- 25 蛩 声はせて身をのみこかす蛩こそいふよりまさる思ひなるらめ
- 26 とこなつ なたしこのとこなつかしき色をみはもとのかきねの人や尋し
- 27 かゝり火 かゝり火にたちそふ恋のけふりこそ世にはたえせぬほのほなりけれ
- 28 野わき 風さはきむら雲まよふゆふへにもわするゝまなくわすられぬきみ
- 29 みゆき をしほ山みゆきつもれる松はらはけふはかりなる跡やなからん

- 30 藤はかま おなし野の露にやぬる、藤はかまあはれはかけよかことはかりも
- 31 真木柱 いまはとてやとかれるともなれきつるまきの柱よ我をわするな
- 32 梅かえ 花のかはちりにし枝にとまらねとうつらん袖にあさくしまめや
- 33 藤のうら葉 春日さすふちのうら葉のうちとけて君しおもは、われもたのまん
- 34 若菜 小松はらすゑのよはひにひかれてや野辺のわかなもとしをつむへき
- 35 わかな 夕やみは道たとくし月まちてかへれわかせこそそのまにも見ん
- 36 かしは木 いまはとてもえんけふりもむすほ、れたえぬ思ひのなをや残らん
- 37 横笛 よこふえのしらへはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせぬ
- 38 すゝむし 心もて草のやとりをいとへともなをす、虫のこゑそふりせぬ
- 39 夕霧 山里のあはれをそふる夕きりにたち出んそらもなきこ、ちして
- 40 御法 たえぬへき御法ながらそたのまる、よ、にとむすふなかのちきりを
- 41 まほろし おほそらをかよふまほろし夢にたに見えこぬ玉の行ゑたつねよ
- 42 匂みや おほつかなたれにとはましいかにしてはしめもはてもしらぬ我身は
- 43 紅梅 こゝろありて風のにほはすその梅にまつ鶯のとはにやあるへき
- 44 竹川 たけ川のはしうち出し一ふしにふかき心のそとはしりきや
- 45 はしひめ 橋姫の心をくみてたかせさすさほを雫に袖そぬれぬる
- 46 しるかもと たちよらんかけとたのみししるかもとむなしきとこになりけるかな
- 47 あけまき 総角になかきちきりをむすひこめおなしところによりもあはなん

48 さはらひ 此春はたれにかみけんなき人のかたみにつめるみねのさはらひ

49 やとり木 やとりきとおもひ出すはこのものたひねもいかにさひしからまし

50 あつまや さしとむるむくらやしるきあつまやのあまりほとふるあまそゝきかな

51 うき舟 たちはなの小嶋の色はかはらしをこのうきふねそゆくゑしられぬ

52 かけろふ ありと見て手にはとられすみれはまた行ゑもしらすきえしかけろふ

53 手習 身をなけしなみたの川のはやきせをしからみかけてたれかとゝめし

54 夢のうき橋 のりのしとたつぬるみちをしるへにておもはぬ山にふみまとふかな

■本文の系統

該書に引かれた五十四首の選出歌の中で、実は〈藤裏葉〉と〈若菜下〉の二首は源氏物語和歌からではなく、地の文で引かれた本歌から採用されているのだが、この二首を除く五十二首について、池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇』で確認してみると、〈帚木〉〈若紫〉〈榊〉〈蓬生〉〈絵合〉〈初音〉〈若菜上〉〈柏木〉〈鈴虫〉〈夕霧〉〈稚本〉〈蜻蛉〉の十二帖の歌は、本文に異同のないことが判った。源氏物語の場合、物語歌で諸本が相互に独自異文をとる例は散見するものの、ある系統に属する諸本がまとまって異文を形成し、本文系統の違いを露呈する例はさほど多くない。残る四十首のなかで、そうした異同を示す例として僅かに注目できるのが、次の四例である。以下、該書以外の諸本名は『大成』で使用された略号でしるし、更に河内本系諸本の略号には（）印、別本には〔〕印を被せておくことにする。

① (し)けきなけきの中を) わくらん

(イ) わくらん…大横神池肖三〔陽〕・該書

(ロ) わけけん…〔御七宮尾大鳳曼〕〔平〕

〔関屋〕の歌。青表紙系諸本が(イ)の「わくらん」で一致し、河内本系諸本が(ロ)の「わけけん」で一致するといふなかにあつて、該書が(イ)に分類された例である。

② ふるさに

(イ) ふるさに…横氏陽池三〔御保冷大國〕・該書

(ロ) ふるさに…(七)

(ハ) 山さに…大為肖

※別本なし。

〔松風〕の歌。この巻には別本はない。ここでは青表紙系諸本が(イ)「ふるさに」と(ハ)「山さに」に大きく分裂している。青表紙のなかの大島本・為家本・牡丹花肖柏本が「山さに」だが、加えて明融本(実践女子大学山岸文庫本。当該巻は「明融」の極札をもつが奥入はない)でも「山里」とあるため、あるいは「山里」の方が定家自筆本の原文に近いのかもしれない。一方、河内本は「ふるさに」の本文でほぼまとまっている(七毫源氏の「ふるさに」は「ふるさに」の衍字であろう)。そのなかにあつて該書は「ふるさに」の本文をとっている。

③ 色や(まかへる)

(イ) 色や…御大横池耕肖三〔麦阿〕・該書

(ロ) いろそ…〔七宮尾大曼〕〔陽保坂〕

〈薄雲〉の歌。青表紙系諸本が(イ)の「色や」で一致し、河内本系諸本が(ロ)の「いろそ」で一致するとき、該書が(イ)の本文をとっている。

④ 神さひぬらし

(イ) 神さひぬらし…大横平池肖三〔国麦阿〕・該書

(ロ) 神さひぬらむ…(御七宮大鳳尾)

(ハ) 神さひぬらん…〔讃陽保〕

〈少女〉の歌。青表紙系諸本が(イ)の「神さひぬらし」で一致し、河内本系諸本が(ロ)で一致したなかにあつて、該書は(イ)の本文をもつ。

四十二首中、青表紙と河内本とが系統としてはっきり対立したのは①③④の三例であつて、該書はそのいずれにおいても青表紙系と一致しており、その逆の例はない。どうやら該書は青表紙系の本文とみてよいように思われる。また①④のいずれにおいても該書は三条西家本と一致していることから、同じく青表紙系諸本のなかでも室町期の本文とされる三条西家本などに近いかと思われる。

次に、該書には独自異文が多いことも指摘しておく。先に掲げた翻刻のうちゴチック体でしるした箇所が該書の独自異文だが、これらをまとめると次に掲げた【表Ⅰ】のようになる。

【表 I】

番号	巻名	該書の独自異文	青表紙	河内本	別本
⑤	桐壺	(なかき) よに (むすひこめ) はや	世を つや	世を つや	世を つや
⑥	同	(身をかへて) けり	ける	ける	ける
⑦	空蟬	(ほの／＼) 見ゆる	みつる	みつる	みつる
⑧	夕顔	(露のやとりを) わかむらに	わかむまに 但し横山本「わけむまに」	わかむまに	わかむまに
⑨	花宴	(花ちるさと) に	を	を	を
⑩	花散里	なに (みおつくし)	など	など	(別本ナシ)
⑪	滯標	(をとめ子) か	も	も	も
⑫	少女	(よはひ) 過ぬれは	へぬれは	へぬれは	へぬれは 但し国冬本「へぬれと」
⑬	同	(尋) きつらし	きつらむ	きつらむ	きつらむ
⑭	玉鬘	(人や) 尋し	たつねむ	たつねむ	たつねむ
⑮	常夏	(松はら) は	に	に	に
⑯	御幸	露にやぬる、	露にやつる、	露にやつる、	(別本ナシ)
⑰	藤袴	(やと) かれるとも	かれぬとも	かれぬとも	かれぬとも 但し為相本「かれぬらん」
⑱	真木柱	(ねこそ) つきせぬ	つきせぬ	つきせぬ	つきせぬ
⑲	横笛	(しらぬ我身) は	そ	そ	そ
⑳	匂宮	その (梅に)	その、	その、	その、 但し麦生本と阿里莫本「を」
㉑	紅梅				

②⑥	東屋	とはにや (あるへき)	とはすや	とはすや
②⑤	早蕨	(ふかき心の) そとは	そこは	そこは
②④	橋姫	さほを (雫に)	さほの	さほの
②③	竹川	(たれにか) みけん	みせむ	みせむ
		(むくらや) しるき	しけき	しけき

殆どが一文字程度の異同、しかも「ハ」「つ」「り」「る」「ら」「ま(万)」「に(爾)」「と」「し(之)」「む(尤)」「は(者)」「そ(曾)」「と」「こ」「け(遣)」「せ(世)」といった、くずし字にすると混同しやすい文字ばかりである。加えて⑨⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕などは明らかかな誤文であり、該書の独自異文はその殆どが単純な書写ミスによるものとみてよい。結局、該書の本文は青表紙系だが、誤写などによる独自異文もかなり多いとまとめられるだろう。

### ■選出歌の分析

該書はどのような歌を〈一帖一首〉の歌に選定したのだろうか。先ず、もともと当該巻に歌が一首しかない〈匂宮〉と〈夢の浮橋〉の場合は、当然その唯一歌が掲載されている。また由来歌のある巻は、やはりその殆どが用いられていた。但し〈葵〉〈明石〉〈柏木〉の三帖は、由来歌があるにもかかわらず、わざわざ別の歌が選択されているようである。すなわち、〈葵〉では従来、葵祭で源氏と源内侍とが交わした贈答歌

・ はかなしや人のかざせるあふひゆへ神のゆるしのけふを待ける(注)

(孟津抄・絵入源氏・湖月抄)

・ かざしける心ぞあだにおもほゆる八十ヤソウジ氏人になべてあふひを

(湖月抄)

などが由来歌として特定されてきたようだが、該書が選んだのは、髪削ぎをした若紫を想っての源氏の詠「はかりな

き千尋のそのみるふさのおひゆくすゑはわれのみそ見ん」であつて、「葵」という言葉が詠み込まれていない歌である。また〈明石〉では、

・ なけきつゝあかしのうらに朝霧のたつやと人をおもひやる哉

(孟津抄・絵入源氏)

・ ひとりねは君もしりぬやつれと思ひあかしのうらがなしさを

(湖月抄)

が由来歌として特定されてきたが、該書はこれを承けず、明石の君の許へと通う道すがら、都に残してきた紫の上を想つての源氏の独詠歌「秋の夜のつきけのこまよわかこふる雲井をかけれ時のまもみん」を採用。〈柏木〉では落葉宮が夕霧に返したところの

・ 柏木に葉守のかみはまさすとも人ならすへき宿の木すゑか

(源氏物語提要・孟津抄・絵入源氏・湖月抄)

が由来歌とされてきたが、該書は柏木が苦しい息の下から女三宮に送つたところの「いまはとてもえんけふりもむすほゝれたえぬ思ひのなをやらん」を選んでゐる。いずれも、巻名を詠み込んだ歌というよりは、その巻の主題をより強く顕した歌の方を選んだということだろうか。

また〈藤裏葉〉と〈若菜下〉の二帖は、当該巻中に作中和歌が多くあるにもかかわらず、引歌の方を採用している。すなわち〈藤裏葉〉は詞に拠る巻名として、従来の古注釈では由来歌は示されなかつたのを、該書は「春日さすふちのうら葉のうらとけて君しおもは、われもたのまん」を採用した。この歌は源氏物語の和歌ではなく、内大臣が自邸に夕霧を招き、雲井雁との結婚の許しをほのめかしたところの地の文「…御時よくさうどきて、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる」<sup>(注9)</sup>で用いられた本歌である。源氏物語の歌ではないが、「藤裏葉」という巻名を詠み込んでゐること、夕霧と雲井雁の結婚という大事な場面で用いられた等の理由などから、採用されたのだろうか。

〈若菜下〉も詞に拠つた巻として、従来の古注釈が由来歌を殆ど挙げなかつた巻である。僅かに『河海抄』が「此

卷一名もろかつら云々 おち葉をなに、ひろひけんの歌による歟 当流不用之」として、落葉宮の降嫁を許された柏木の独詠を紹介したが、「当流不用云々」とあるように、支持はしなかった。ところが該書は「夕やみは道たとくし月まちてかへれわかせこそそのまにも見ん」を挙げている。この歌は『万葉集』（巻四 七二二番）に豊前国娘子大宅女の詠として掲載されるほか、『古今和歌六帖』（第一「ゆふやみ」三七二番）や『伊勢集』（四三七番）にも収められた歌で、源氏物語の注釈書でも、源氏の辞去を引き留めようとする次のくたり

…すこし大殿籠り入りにけるに、蛸のはなやかに鳴くにおどろきたまひて、「さらば、道たどたどしからぬほどに」とて、御衣など奉りなほす。「月待ちて、とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは憎からずかし。

の本歌として、『源氏釈』や『河海抄』などが紹介している。ここで女三宮が「月待ちて、とも言ふなるものを」と発言したがために、結局源氏は宮の許に一泊し、翌朝柏木の文を見つけるといふ展開になってゆくのだが、物語世界の転換点にたつ重要な本歌といえなくもない。

ともあれ、注意したいのは該書のかかる選択は決して特異なものではないという点である。他にも同じような選択をした資料があり、該書はそうした資料の系譜に連なっているように思われる。そこで次からは少々迂回することになるが、カルタを離れ、由来歌について考えてみたい。

### 三 由来歌と〈一帖一首〉歌

源氏物語における巻名の由来に関する考察は、『河海抄』（注10）

・桐壺は淑景舎也 此所曹司たるによりて光源氏の母御息所を桐壺の更衣といふ

仍巻名とせり

〔河海抄〕桐壺卷

・巻名 てにつみていつしかもみむ紫のねにかよひたる野への若草

〔同。若紫卷〕

とし、また『異本紫明抄』（注）が

・当巻号若紫事

此巻以紫上之事為宗故此号歟抑称紫上之故者紫上依為藤壺之親類作出此名歟

むらさきの一もとゆへに武蔵野の草はみなからあはれとそ思ふ

と云歌の心なるへし

〔異本紫明抄〕若紫卷

・当巻号花散里事

今案曰此巻以有橘花之里為宗其歌曰

たち花の香をなつかしみ時鳥花散里をたつねてそとふ

奥

此名一句為巻名也

〔同。花散里卷〕

・当巻号須磨事

源氏向須磨事為此巻宗仍名之

今案

〔同。須磨卷〕

とするなど、鎌倉時代の注釈書にその萌芽が散見できる。しかしそれらは全巻にまたがったものではなく、また〔若紫〕の由来歌が『河海抄』と『異本紫明抄』とで違っている等、まだまだ模索状態だったといえるだろう。

それを天台四諦の法門に関連づけ、しかも五十四帖全体にわたっての理論化を試みたのが『花鳥余情』であった。

〈桐壺〉の巻頭で兼良は

凡五十四帖の巻の名に四の意あり 一には詞をとり二には歌をとる 三には詞と歌との二をとる 四には歌にも詞にもなき事を名とせり 天台の教に四諦の法門あり 一には有門二は空門三は亦有亦空門四は非有非空門也 一切の言教は此四諦に出す 是によりて故四諦外別立法性とも釈せり 眞実の道理は言教の外にあるべき物也<sup>〔注12〕</sup> とし、以後「此桐壺の巻は詞をとりてつけたる名也」とか「以歌為巻名也」といった調子で、全巻にわたつての分析を試みた。そして兼良のこの理論は諸注釈書にずっと継承されてゆくことになるのである。

ただし注意したいのは、兼良は巻名の由来について理論分析しただけであつて、では具体的に「以歌為巻名」とされた歌とは、一体どの歌なのかという点については、〈若紫〉等の少数例を除いて、明言しなかつたことである（因みに〈若紫〉の由来歌は『河海抄』と同じ「手につみて」を採用）。

ところが梗概をのべながら源氏物語の全ての和歌についても解説した『源氏物語提要』（以後『提要』と略）では、巻名の由来の分析ともども、由来歌がある場合にはどの歌がそうなのか、具体的な由来歌の特定がなされていつたようである。（なお『提要』跋文に従えば、その成立を『河海抄』と『花鳥余情』の中間に位置づけることも可能である。但しこの跋文については問題視する説もあり、本稿では立ち入らない。）例えば『提要』（〈若紫〉）では

・ 詞に若紫とつきたるはなし。歌に

手につみていつしかも見ん紫の根にかよひける野辺の若草、此ころをとりて巻の名としける也。

のように巻の冒頭で説明したり、〈空蟬〉のように、梗概のなかで由来歌が登場するくだりになつて

・ うつせみのみをかへてけるこのもとに猶人からのなつかしきかな

此歌ゆへに此巻を空せみの巻といふ。又、此女をもうつせみの君といふ。…〔注13〕

と指摘する場合もあるという具合で、巻名の由来が歌にあるとした巻については、〈葵〉を除く全ての巻でどの歌が由来歌かを特定しているのである。

かかる由来歌の特定は、このうち天正三年（一五七五）に成立した九条種通の『孟津抄』や、慶安三年（一六五〇）刊行の『絵入源氏物語』（付録「源氏目案」の中で由来歌の一覧表を提出）、更には延宝元年（一六七三）刊行の北村季吟『湖月抄』でも行われていった。清水婦久子氏の指摘によれば、こうした由来歌が固定化されていったのは『湖月抄』にいたってからのことであり、またその『湖月抄』は『孟津抄』に依拠したのだろうということである。<sup>〔注15〕</sup>

以上、源氏注釈書における由来歌の流れを概括してみたが、このような動きがあった一方、見過ごしてならないのは梗概書や啓蒙書の類であろう。例えば『源氏大鏡』や『源氏小鏡』といった梗概書では、文中で「此歌ゆへに此巻を…といふ」方式で由来歌を紹介し、また〈一帖一首〉あるいは〈一帖一首一函〉で各巻の紹介を試みた啓蒙書類においても、由来歌は多少の揺れを含みながらも継承されてゆくからである。

さて文末に掲げた【表Ⅱ】（79頁参照）は各資料の由来歌をまとめたものである。近世期に刊行された〈一帖一首一函〉の源氏資料は多く、本稿でその全てを網羅することはできないが、さしあたって、小島宗賢・鈴木信房著『源氏鬢鏡』（万治三年一六六〇刊）（以後『鬢鏡』と略）、貝原益軒等著『女大学宝箱』（享保一八年一七三三刊）（以後『宝箱』と略）、北尾重政画『群花百人一首』（天明五年一七八五刊）（以後『群花』と略）、溪斎英泉画『源氏物語五十四帖絵尽』（文化九年一八二二刊）（以後『絵尽』と略）、池田悠編・溪斎英泉画『秀玉百人一首小倉栞』（天保七年一八三六刊）（以後『秀玉』と略）、歌川豊国画『源氏絵物語』（元治元年一八六四以前か）猪瀬尚賢著『御家百人一首千載文庫』（慶応元年一八六五刊）（以後『御家』と略）などを採り上げ、作業仮説的に分析してみよう。<sup>〔注15〕</sup>

まづこの表の説明をする。「A群」は、由来歌の特定を試みたとみられる注釈書『源氏物語提要』『孟津抄』『絵入源氏物語』『湖月抄』である。「B」には注釈書ではないが、由来歌を挙げて各巻の大意を示しながら、俳人たちが巻の心を詠んだ『源氏鬢鏡』を入れておいた。「C群」は『群花百人一首』『女大学宝箱』『源氏物語五十四帖絵尽』『秀玉百人一首』『源氏絵物語』『御家百人一首』といった〈一帖一首一図〉で構成された諸資料。そして「D群」にはカルタ資料として、文芸資料研究所蔵『源氏カルタ』と、比較のため滴翠美術館蔵『源氏カルタ』<sup>注16</sup>を挙げておいた。このC・D群の資料で採用された歌は一帖一首の原則による〈選出歌〉であるから、A・B群の資料のように同じ巻の中で複数の由来歌をもつことはありえない。BをC群から分けたのはそのためである。

以上A～D群資料の挙げたさまざまな由来歌ないし〈一帖一首〉の選出歌を網羅したのが「歌群」である。そしてA～D群の各項にある○印はその当該歌を採用した、×印は採用しなかったの意味である。

そこで先ず、諸資料が由来歌として掲げた「歌群」の列を見ると、箒木巻の『孟津抄』『湖月抄』のように、同一巻で複数の由来歌が挙げられる場合があること。〈箒木〉の「そのはらや伏屋におふる…」、〈藤裏葉〉の「春日さす藤のうら葉の…」のように、物語歌自体ではなく、本歌となった古歌の方が由来歌に特定される場合があること。『源氏鬢鏡』の〈螢〉のように、螢兵部卿宮と玉鬢との贈答歌を挙げた場合もあったこと等が窺われよう。螢巻の贈答歌の場合は、「螢」の巻名を詠み込んでいるのは玉鬢の答歌だけなので、厳密な意味での由来歌はこの一首だけでよかったはずだが、『源氏鬢鏡』は由来歌を呼び起こした贈歌として、兵部卿宮の歌も併せて紹介されたものと思われる。かくして源氏の巻々には複数の由来歌が登場し、〈一帖一首〉資料はそのなかから一首だけを選ぶという選出作業が必要となっていたわけだが、その選出結果には資料によって揺れがあったようである。【表II】を通覧して気づいた点をまとめてみよう。

(1) A・B群によって示された由来歌を、C・D群の資料が継承したのは（中には複数の由来歌から取捨選択してという作業があったにせよ）、四十三首だったこと。

(2) その四十三首中、〈滯標〉〈野分〉〈藤裏葉〉〈鈴虫〉の四帖はA群にはなく、B（『源氏鬢鏡』）だけが指摘した由来歌であったこと。

(3) ところがその一方で、〈葵〉〈須磨〉〈明石〉〈柏木〉の四帖におけるC・D群の選択歌は、由来歌があるにもかかわらず、それとは異なる歌であったこと。しかもその歌はC・D群の諸本間で一致していたこと。

(4) 〈二帖二首〉の原則をもつC・D群資料は、当然のことながらA・B群が由来歌を特定しなかった七帖（桐壺〉〈紅葉賀〉〈花宴〉〈絵合〉〈若菜下〉〈匂宮〉〈紅梅〉）においても、代表歌一首を選出しなければならなかったわけだが、その選出歌は殆ど一致していたこと。

(5) (4)に限らず、C・D群の選出歌は殆ど一致していること。例外は滴翠美術館蔵源氏カルタのみが、〈花宴〉〈若菜下〉〈柏木〉で別の歌を選んでいること。一方、該書（文芸資料の源氏カルタ）はC群の資料と同じ選択をしていること。

このようにみてくると、〈一帖一首〉のC・D資料には確かにA群（古注釈の系譜）とは異なった独自の流れがあったようで、該書もその中に組み入れられるようである。その系譜の始源をどのあたりに求めればよいかは未だ不明だが、Bの『源氏鬢鏡』などはA群とC・D群の中間的存在として注目できるかもしれない。

## 四 絵

## ■ (一帖一図)の流れ

〈一帖一図〉の淵源はどのあたりに求められるのか。秋山光和氏によれば、室町末期から土佐派を中心とした絵師たちによって様々な源氏物語色紙絵が作成され、公家・武士・町人を問わず幅広く享受されていたという<sup>注17)</sup>。なるほど、現存最古の源氏絵色紙とされているのは、室町期の制作だろうとされているハーバード大学美術館所蔵「源氏物語画帖」だが、そこでは、絵と詞が〈一帖一図〉ずつ画帖に貼られている<sup>注18)</sup>。また慶長頃の作とされる和泉久保徳記念美術館蔵「土佐光吉筆 源氏物語手鑑」(八十枚)、同じく土佐光吉と長次郎の筆とされる京都国立博物館蔵「源氏物語画帖」(絵五十四図・詞五十四枚)も、厳密には〈一帖一図〉でないものの、共に源氏絵が色紙に描かれた早い例であつて、〈一帖一図〉の源氏絵の淵源は、確かにこうした五十四帖色紙絵などに求められるのかもしれない。

一方、近世の出版物として看過できない〈一帖一図〉資料は、慶安三年(一六五〇)に成立した『花堂切臨著『源氏物語綱目』(以下『綱目』と略)<sup>注19)</sup>である。巻毎に、梗概や「連歌に用へき詞」を挙げ、更には「ゑにかくへき所の詞をのせ、絵を入畢」(自序。傍点稿者)という構成で編纂されたこの資料は、それまで絵図化されてきた場面は数多くあつただろうに、各巻からたった一つだけ画題を選びとり、その絵に盛り込むべき人物や事物等のこまかな注記まで添えて、具体的な見本絵を入れたのであつた。しかもこの試みが、『源氏鬢鏡』『絵入源氏小鏡』より古く、挿絵入り源氏刊本の嚆矢として名高い山本春正の『絵入源氏物語』(実に二二六図もの絵を挿入した)と同年に成立していたことも興味深い(尤も刊行自体は『絵入源氏』より六年ほど遅れ、『鬢鏡』と同年となるのではあるが…)。

また中世以来の流れをひく梗概書の挿絵入り版本として、『絵入源氏小鏡』も注目できよう。吉田幸一氏によれば、同書には上方で刊行された明暦三年（一六五七）版と寛文六年（一六六六）版、江戸で刊行された延宝三年（一六七五）版と無刊記須原屋版本の四種があり、うち上方版の二種は（一帖一図）だが、江戸版の二種は四十四図、五十六図と不揃いであること、しかし無刊記須原屋版本は師宣画とみられる鱗形屋版『源氏鬢鏡』（万治三年一六六〇刊）との関係性が最も深いこと等が指摘されている。（注20）

ともあれ、かくして（一帖一図）の版本が流布しはじめると、これに各巻の選出歌一首を加えた資料も工夫されるようになったのだろう。（一帖一図一首）と単純化すれば、それだけ源氏物語の全体像は捉えやすくなる。絵も入って解りやすくコンパクトであることから、初心者向きの企画として広く支持され、ついには『百人一首』のテキストの上段や巻末付録に、あるいは各種女子用往来物などに「源氏香図引歌」「源氏五十四帖引歌香図」などと称して各巻毎の源氏香と図と由来歌を掲載した資料までが輩出したようである。

源氏カルタも、当然この延長線上に位置づけられるものである。但し留意したいのはカルタの場合は小さな札に描かれることでもあり、その絵も冊子のものとは違ってくるのではないかと一点である。因みに伊井春樹氏は（若紫）（垣間見の場面）の挿絵を例に、場面の象徴化が進み、ついには記号化まで行き着いたとして、その極北の形を「源氏かるた」や「源氏香之図」に求められている。（注21）なるほどカルタの場合、物語世界の具体的な一場面を描いた場面絵よりは、その巻を象徴するような景物だけをクローズアップした方が描きやすくなるだろう。その意味において、源氏カルタの分析には（一帖一図一首）資料の流れを承けながら、さらにもう一ひねりの考察が必要となるようである。

■ 〈一帖一図〉資料の画題

文末に掲げた【表Ⅲ】(83頁)の説明から始めよう。この表は、〈一帖一図〉の諸資料がどのような絵を描いているのか、各々の画題を私にまとめたものである(但し、本稿では構図には拘らなかつた)。採用したのは『綱目』をはじめとする十二本。これらの絵の画題をまとめたのが「画題」の項である。そしてその画題が『絵入源氏』の挿絵と重なる場合には『絵入源氏』の挿絵番号を付し<sup>注22)</sup>、『絵入源氏』の挿絵に無い絵には★印付きの新たな番号を付しておいた。そして絵の画題がまさしく選出歌の詠まれた場面絵そのものである場合には、番号に網をかけておいた。

〈桐壺〉を例に説明しよう。描かれた画題は『絵入源氏』の挿絵でいうところの「1源氏の誕生により、桐壺更衣に曹司を賜う」「4高麗の相人、源氏を占う」「5源氏の元服の儀式」の三つと、と『絵入源氏』の挿絵に無い「★1桐の花の絵」を併せた計四つである。うち1の画題を採用したのが『無刊記小鏡』『鬢鏡』『秀玉』『絵物語』『滴翠』の五本、4の画題を採用したのが『明暦版小鏡』、5の画題を採用したのが『綱目』『宝箱』『絵尽』『群花』『文芸』の五本、★1の画題を採用したのが『御家』である。このうち選出歌「いとときなきはつもとゆひにながきよにちぎるこ、はむすびこめつや」の詠出場面と一致するのが5の画題を選択した五本ということになる。

さて【表Ⅲ】で採用した十二本中B群に分類した『御家』『滴翠』『文芸』の三本は、場面絵というよりは景物中心の絵となっている。その最も典型的なのが『御家』で、例えば〈空蟬〉巻では松の幹に止まった蟬(抜け殻か)を描く、〈若紫〉に雀と籠を描く、〈蛩〉に几帳と虫籠を描くといった具合である。よってこの三本については、場面絵のみを描いた他の九本(表では「A群」とした)を分析した後に触れることにしたい。

また九本の中でも、〈一帖一図〉のはずの『無刊記版小鏡』は〈若菜上〉に二図入り、逆に〈若菜下〉では挿絵なしとなっている。『絵物語』も〈藤裏葉〉と〈紅梅〉と〈柏木〉と〈花宴〉と〈匂宮〉と〈竹川〉、〈椎本〉と〈橋姫〉にお

いて絵がそれぞれ逆に用いられたり、〈紅梅〉の絵が〈幻〉にも用いられる等、若干の齟齬がある点も予め断っておく。ともあれ、【表Ⅲ】に示したA群の九本をみてみると、各資料が足並みを揃えて同一画題を採用している巻と、そうでない巻とがあることに気がつく。前者の場合九本全てが一致したのは

- ・ 花散里巻「源氏、麗景殿女御と昔話をする。時鳥が飛ぶ」
  - ・ 須磨巻「源氏、須磨の寓居より海を眺め、都を偲ぶ」
  - ・ 濡標巻「住吉詣。牛車の源氏一行と船中の明石の君一行」
  - ・ 蓬生巻「源氏、従者等をつれて蓬生の庭を分け入る」
  - ・ 関屋巻「源氏の牛車、空蟬一行と関ですれ違ふ」
  - ・ 絵合巻「宮中での絵合の様子」
  - ・ 初音巻「明石姫君の許に、明石君より正月祝いの品々が届く」
  - ・ 蛩巻「源氏、玉鬘に蛩を放つ。それを垣間見る兵部卿宮」
  - ・ 篝火巻「琴を枕に源氏と玉鬘は共寝する。庭には篝火」
  - ・ 藤袴巻「夕霧、玉鬘に御簾越しに花を差し出す」
  - ・ 鈴虫巻「源氏、琴を手に入道宮と歌を交わす」
  - ・ 紅梅巻「紅梅大納言、紅梅に付けて匂宮に文を書く。使者は若君」
- の十二帖である。また全本一致したわけでもないが、〈紅葉賀〉「青海波の舞の場」、〈葵〉「車争い」、〈御法〉「法華經千部供養」、〈早蕨〉「阿闍梨より届いた髭籠を見る中の君」、〈浮舟〉「雪の朝、匂宮と舟に乗る浮舟」の各図も一致度が高い。

これは、同じ絵師によって描かれた資料の間（例えば深斎英泉画による『絵尽』『秀玉』『群花』）にも画題に揺れがみられることから勘案するに、画題の固定化が進んだ巻とそうでない巻とがあつたといふことなのではなからうか。固定化が進むと、その画題でないと読者が納得しなかつた、しかし固定化がさほど強くなかつた巻では、画題の選択は絵師の自由な裁量に委ねられ、結果、同じ絵師が仕事によつてさまざまな画題の選択を樂しめたと考えられそうである。

また五十四図中、選出歌の出詠場面と合致した画題が四十例ある。この数字を多いとみるか少ないとみるかは人さまざまだが、注意したいのは、合致した画題があるにもかかわらず、わざわざ合致しない画題の方を選び取る場合も相当数あつたという点である。かかる例がある以上、和歌と絵とが乖離してもさして問題にはならなかつたと推測せざるを得ないのだが、よく考えてみると、その巻を代表する歌と絵とは違つていた方が、相異なる二つの方向から当該巻の特性を示唆することができ、歌と絵が一致した場合（ヒントは一つということになる）よりも効果的だつたのかもしれない。

また〈空蟬〉の場合をみるに、選出歌は物語の終末で、空蟬との苦い恋を回顧して源氏が詠んだところの「うつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」であるにもかかわらず、各種資料が選んだ画題は「11 源氏、碁を打つ空蟬と軒端の萩を垣間見」か「15 源氏部屋に忍び込むも、空蟬は衣を残して逃れる」で、直接の出詠状況とは異なつている。しかしながら源氏のこの苦い独詠歌は、この事件の全てに響きわたつていよう、そういう意味では「11」でも「15」でも違和感は何も感じられない。歌というものが本来有しているところの包括力の大きさ、響きの強さともいうものが機能した結果とも受け取れるようである。

以上のことを押さえた上で、絵の場合も選出歌の場合と同じように、A群の資料は選択された画題によつてグループ分けができるかを考えてみたい。

【表Ⅳ】

資料名	2本のみの共通画題数		画題一致数								
	独自画題数	主な内訳	網目	明暦	無刊記	鬢鏡	宝箱	絵尽	秀玉	群花	絵物語
網目	16	明暦2、他	27	27	23	21	27	28	24	27	21
明暦鏡	6	網目4、他	27	24	22	21	27	28	25	34	32
無刊記鏡	2	鬢鏡2、他	23	24	47	22	27	39	44	27	21
鬢鏡	1	無刊記2、他	23	47	41	40	40	39	44	27	21
宝箱	2	絵尽3、他	26	40	41	41	50	40	50	29	23
絵尽	0	宝箱2、他	27	38	41	50	50	40	44	33	27
秀玉	0	鬢鏡1、他	24	44	40	44	43	43	43	34	28
群花	2	明暦2	27	28	29	33	30	30	30	30	26
絵物語	12	明暦2、他	27	28	29	33	33	30	28	28	28

右の【表Ⅳ】は、A群の九本が採用した画題について、その一致数を示したものである。「独自画題数」とは九本のなかでその資料のみが単独で、独自の画題を選択した数のこと。「二本のみの共通画題数」とは、九本のなかでその資料ともう一本の二本だけが共通した画題を採用し、他の諸本と対立した数のこと。「主な内訳」とあるのは、それがどの資料とだったのかを示したものである。「画題一致数」では資料相互の画題の一致した数である。

これによれば『綱目』はA群の中では最も早く成立したにもかかわらず、独自異題数が16と他を圧倒して高い。また他のどの諸本と比べても、平均した画題一致数であって、その数値も(21~28)と低いものであることから、あまり影響を及ぼさなかったことが窺われる。

次に『絵入源氏小鏡』だが、同じく小鏡であるものの、上方版『明暦版』と江戸版『無刊記版』とは絵師の相違もあつたためか（『無刊記版』は菱川師宣風）、両者間の画題一致数は23とさして高くない。『明暦版小鏡』との一致度が高いのは『無刊記版』の23よりは、むしろ『群花』の34『絵尽』の32の方である。

一方、『無刊記版』と最も一致数が多かつたのは、師宣が描いた『鬢鏡』の47であり、これに溪斎英泉画の『秀玉』44、絵師未詳の『宝箱』40、歌川豊国画の『絵尽』39等が続いている。この四本に比べると他の資料は、英泉画『群花』27、『綱目』と『明暦』が23、『絵物語』が21と、軒並み一致数は下がっている。よつて『無刊記版』に対しては『鬢鏡』『宝箱』『絵尽』『秀玉』の四本が揃つて高い一致率（47／39）を示しているといえるだろう。同様のことは『鬢鏡』や『宝箱』その他をもとにした一致数をみても該当する。本来ならば〈若菜上〉にあるべき「133 柏木、女三宮を垣間見」の図を、『鬢鏡』『宝箱』『絵尽』『秀玉』の四本が揃つて〈若菜下〉に入れている点も興味深い事例である。このように見るならば『無刊記版』と『鬢鏡』といずれが先行するかは不明だが、ひとたび刊行されるやその影響は大きく、後出の『宝箱』『絵尽』『秀玉』などはその影響を受けたといえるのではあるまいか。ところがその後刊行された『群花』『絵物語』になると、画題の選択がそれまでとはひと味違ったものに変わっている。この両書は画題一致数の最も多いのが『明暦版』であることから、江戸版とはことなつた上方版小鏡への回帰を意識していたのかもしれない。

#### ■ 該書の絵

以上の事柄を押さえた上で、最後に該書の絵について分析する（具体的な絵柄は文末に付した影印をご参照いただきたい）。再び【表Ⅲ】に戻るが、該書の分類されたB群と、A群資料との違いは、後者はすべて〈場面絵〉すなわ

ち物語の一場面を描いた図であったが、前者には後者に見られなかった〈景物絵〉が入っている点であった。

その典型は『御家百人一首』で、この資料は五十四図すべてが景物で統一されている。例えば〈若紫〉、A群資料では「24 源氏、北山にて若紫を垣間見」や「28 源氏、北山の尼君を見舞う」といった画題の場面絵が描かれているのを、『御家』では雀と鳥籠という景物のみを描く。また〈螢〉、A群では「105 源氏が螢を放ち、几帳越しに浮かび上がった玉鬘の姿を兵部卿宮垣間見る」の画題で統一されていたのを、『御家』では几帳と虫籠を描くといった具合である。

そうした景物の絵は該書にもある。例えば〈葵〉。池の畔に葵と牛車が描かれているが、葵の方はよいとして、なぜそこにわざわざ牛車がいったかは車争いを知らなければ理解できないことだろう。また〈榊〉では黒木の鳥居をくぐる貴公子像を描いているが、これまた野の宮をしらなければ、何の巻か見当がつかない。五葉松と桜を描いた〈初音〉も然り。A群資料では「101 明石姫君のもとに明石君より正月祝いの髭割籠が届く」の場面絵で一致していたのだが、その髭割籠に五葉の松その他の品々が入っていたからである。また〈御法〉。A群では殆どの資料が「155 仏前に法華経千部、僧たちの行道」(紫上が主催した法華経千部供養の場面絵)であったのを、該本では経典と厨子をクローズアップして描いている。

これらの景物は、伊井氏が指摘したごとく、場面絵の象徴化がすすんだ結果、その場面を描かずとも「牛車」「鳥居」「五葉の松」「経典」といったキーワードとなる景物を描いただけで事足りるようになっていたからだろう。

加えてB群資料に描かれた景物の中には、もっと端的でわかりやすいものもある。例えば『御家』の〈桐壺〉では文字通り、桐の花が描かれている。同様に〈夕顔〉には夕顔の花が、〈朝顔〉には朝顔の絵が、〈横笛〉には横笛とそれを収める袋の絵が、〈総角〉には総角の絵が描かれるといった具合に、巻名そのものを描いた絵も多数見られるか

らである。これらの絵は、たとえ巻の内容を知らなくとも絵から巻名が類推できそうである。強いというならば、景物の絵がそのまま絵文字（記号）となつていくということか。そうした景物絵は該書にもあつて、例えば紅梅を描いた〈紅梅〉、東屋を描いた〈東屋〉、文机と手習の具を描いた〈手習〉等がこれに属するように思われる。

ところがこうした象徴性の進んだ景物絵や記号化した景物絵がある一方で、該書『滴翠カルタ』も同様だが）には更にA群資料と同じような場面絵も含まれるのである。例えば〈桐壺〉の場合、該書では「5元服儀式」、『滴翠カルタ』では「1源氏誕生により、更衣に曹司を賜う」の場面絵が描かれている。むしろ小さな絵札のことであるから、A群諸本の場面絵と比較すれば人物や構図等にかんがりの省略がめだつものの、それでも物語の一場面を描こうとしていることは了解できるようである。ことに該書の〈桐壺〉元服の図は、五十四枚の絵札のなかで最も精緻に描かれたものといえるだろう。

この〈桐壺〉ほどではないにせよ、比較的忠実に場面絵を描いたものとしては、〈箒木〉〈夕顔〉〈宿木〉〈浮舟〉などもあげられるように思う。例えば〈箒木〉。該書では「★2簀の子から部屋の様子を窺う貴公子」の絵を描く。極端に省略はされているものの、これはA群資料の画題となつた「11 源氏、紀伊守邸に渡り、部屋の様子を窺う」をもとにしているのではあるまいか。なお【表Ⅲ】B群資料で（）印を被せた数字（例えば〈箒木〉では「★2（11）」とあるのは、そうした場面絵につけたものである。

同様に、〈夕顔〉では女性が扇を手に門口に立っている絵を描くが、これはA群資料の「★1 夕顔の侍女、門口で扇を手に惟光に手渡す」の場面絵の構図を、扇をもつ侍女だけに絞り込んで描いたものと判断できる。〈宿木〉では宿木（赤い蔦か）の絡んだ木の下に立つ貴公子像が描かれている。これはA群193の画題の、弁尼の部分の省き、薫

の部分だけを取り上げたとも解釈できなくもない。「簀の子から部屋の様子を垣間見る男」「扇を手に門口に立つ女」「宿木が絡んだ木の下に立つ男」等々、こうした構図は構図自体が既にその巻を象徴するものとなっていたようである。景物絵で指摘したところの、巻巻を象徴する事物の固定化が、場面絵（構図）においても、まま見かけられるということなのだろう。

最後に指摘したいのは、該書の絵にはいくつかの基本構図があつて、これに簡単な事物を追加することによって各巻の識別化をはかったように思われることである。安易な方法ではあるが、追加された事物や巻名・和歌と響きあつて、なんとかその識別化に成功したと思われる例もないわけではない。

例えば「部屋（端近や簀の子の場合もあるが）に坐っている貴公子」という基本構図をもった絵札が八枚（若紫・花散里・藤袴・真木柱・鈴虫・総角・匂宮・夢の浮橋）ある。そのなかの〈若紫〉では基本構図に飛ぶ鳥を追加しているだけのだが、源氏が若紫への想いを込めて詠じた「手に摘みていつしかも見ん紫の根にかよひける野辺の若草」という選出歌と響きあつて、まるで部屋の中で源氏が一人、北山での垣間見を回想している場面かと想像されるのである。しかし描かれた鳥が白く、どうみても雀には見えないのが気に掛かる。また〈花散里〉では部屋ではなく簀の子に坐らせ、「橘の香をなつかしみほととぎす花散里をたつねてぞとふ」の歌を記すが、A群資料のなかには麗景殿女御と昔語りをする源氏を端近に坐らせたり、簀の子に立たせている図もあることから、部屋の奥にいる女御の方は省略し、源氏にのみ焦点を合わせた構図と解されないでもない。しかし本来ならば時鳥が欲しいところ。あるいは絵師は〈若紫〉〈花散里〉その他、いずれでも通用するような図案を描いていたのだろうか。

また〈藤袴〉では庭先に藤袴の花を、〈真木柱〉では庭先に松の木をそれぞれ追加している。前者は藤袴を添えて

夕霧が玉鬘よみかけた「おなし野の露にやつる、藤袴あはれはかけよかごとばかりも」を用いており、庭先の藤袴を眺める貴公子の絵は、玉鬘に心揺らぐ夕霧の姿を彷彿させるようである。基本構図に藤袴を添えたことで、他の巻との識別にも成功したともいえるだろう。後者は父邸を去るに際して真木柱が詠んだ「今はとて宿かれぬともなれきつる真木の柱よ我をわするな」を選んでいたので、庭の松をながめている貴公子の絵は、歌とも巻名とも結びつかないようである。

〈総角〉は基本構図だけで新たな事物は加えられていないものの、男性の顔が他の絵札とは逆に部屋の内の方に向いている。たつたこれだけのことだが、A群資料の画題（故八宮の一周忌の用意をしている大君たちを見ながら、隣室で願文を作成する薫）における薫の顔も、外ではなく、部屋の奥に向かっていたことを彷彿させる構図ではある。また札に記された歌も、この場面で薫が大君に贈ったところの「総角にながき契りをむすびこめ」となっている。

〈鈴虫〉〈匂宮〉〈夢の浮橋〉もまた基本構図だけで追加物はない。〈鈴虫〉はこの絵と共に、落飾した女三宮と鈴虫の声を聞きながら、宮への未練を詠みかけた源氏の歌「心もて草の宿りをいとへどもなほ鈴虫の声ぞ古りせぬ」を記す。物語場面とは直接は結びつかないものの、歌や巻名と響きあつてか、まるで男性が一人ぼつねんと坐つて、鈴虫の声に耳を傾けているかのような趣きも感じられる。〈匂宮〉では自らの出生の秘密に疑心暗鬼する薫が「おほつかな誰にとはましやかにして始めも果てもしらぬわか身を」と詠んだ歌を、〈夢の浮橋〉では横川僧都に仲介を依頼して、薫が浮舟に贈った文中の詠「法の師と尋ぬる道をしるべにておもはぬ山にふみ迷ふかな」を記す。両者とも、只一人部屋に坐つて所在なげに外をみている貴公子の絵を描く。この絵は、物語場面とは結びつかないが、苦惱する薫の姿を彷彿させぬでもない。

該書にはそれ以外にも〈一人で立つている貴公子像〉という基本構図や〈天幕と雅楽器〉という基本構図などもあ

り、追加物によって巻の識別をはかる場合が多いのだが、その成功率は半々というところのようである。

書誌で述べたように、該書では絵の方が歌より先に記された。絵師は、象徴化の進んだ巻や記号化が可能な巻はそれを優先させ、残りはどのようなようにも受け取れるような基本構図にあれこれ付属品を追加した絵柄を作成し、歌の筆耕者にバトンタッチしていたのではあるまいか。

以上をまとめるに

- (1) 該書の和歌本文は青表紙系だが、誤写とみられる独自異文も多いこと。
- (2) 該書の選んだ歌は基本的には由来歌だが、〈葵〉〈明石〉〈柏木〉の三帖は由来歌があるにもかかわらず、別の物語歌を採用していること。〈藤裏葉〉〈若菜下〉は引き歌を採用していること。
- (3) しかし(2)の選定は該書独自のものではなく、〈一帖一首〉資料に先例を求められること。しかもその流れは源氏物語の注釈書からだと考えるより、『源氏鬢鏡』などの啓蒙書の方により近いのではないかということ。
- (4) 〈一帖一首一図〉資料では、巻によって画題が固定化した巻とそうでない巻とがあること。また資料によって画題の選定に親疎関係が認められること。
- (5) 該書の絵はかかる〈一帖一首一図〉資料の影響を受けながらも、カルタという性格上、それらの資料とは異なった特徴も有していること。
- (6) それは画題が固定し象徴化が進んだ結果とみられる景物の絵や場面絵、あるいは巻名をそのまま記号化した絵があるということ。またカルタの絵師はどの巻にも汎用性がきくように、基本構図が同じで、これにさまざまな景物を付加した絵柄を複数用意していたのではないかということ。

となる。

注

- \* 1 引用は『続群書類従』二三輯下所収本に拠った。
- \* 2 三池カルタ記念館HP掲載の写真に依る。
- \* 3 引用は松江重頼著・加藤定彦編『毛吹草 初印本』（一九七八年 ゆまに書房）に拠った。
- \* 4 引用は『続々群書類従』八所収本に拠った。
- \* 5 引用は野間光辰編著『完本色道大鏡』（一九六一年 友山文庫）に拠った。但し句読点は稿者。
- \* 6 引用は『川柳』（小学館新日本古典文学全集）に拠った。
- \* 7 引用は菅宗二編『源氏百人一首』（和泉書院影印叢刊・一九九九年刊）に拠った。但し振り仮名は省略し、私に句読点や傍線を施した。
- \* 8 由来歌の引用は（ ）で示した諸資料の中の、筆頭資料の本文に拠った。この場合は『孟津抄』である。以下同様。
- \* 9 引用は阿部秋生・秋山慶・今井源衛編『日本古典文学全集 源氏物語』（一九七〇年 小学館）に依った。但し傍線は稿者。以下同様。
- \* 10 引用は玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』（一九六八年 角川書店刊）に拠った。以下同様。
- \* 11 引用は『異本紫明抄』未刊国文古注釈大系・第一〇卷（一九六八年 清文堂出版）所収本に拠った。以下同様。

- \*12 引用は中野幸一編『花鳥余情』（源氏物語古注釈叢刊第2巻 一九七八年 武蔵野書院刊）に拠った。以下同様。
- \*13 引用は稲賀敬二編『源氏物語提要』（源氏物語古注集成 一九八五年 楓楼社刊）に拠った。以下同様。
- \*14 清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院研究叢書二九二 二〇〇三年 和泉書院）
- \*15 『源氏鬢鏡』は『批評集成 源氏物語』第一巻近世前期篇（一九九九年 ゆまに書房）所収本、『源氏繪物語』は架蔵本、他はすべて小町谷照彦著『絵とあらずじで読む源氏物語―湊斎英泉『源氏物語絵尽大意抄』』（二〇〇六年 新典社）所収本に依った。
- \*16 円地文子監修『源氏歌かるた』（一九七四年 徳間書店）の複製本によった。
- \*17 秋山光和「源氏絵の系譜」（図説日本の古典『源氏物語』所収。一九七八年 集英社）
- \*18 メリッサ・マゴミツク氏によれば、『実隆公記』永承六年八月三日条の源氏絵に関する記述等が本画帖に一致するとする。「研究補遺 ハーバード大学美術館蔵「源氏物語画帖」と『実隆公記』所載の「源氏絵色紙」（『國華』一二四一号・一九九九年三月）
- \*19 引用は、伊井春樹編『源氏綱目』（源氏物語古注釈集成10 一九八三年 桜楓社刊）による。但し私に句読点を付した。また同書の成立年代についても「料簡（時代）」の記述に依った伊井説に従った。
- \*20 吉田幸一著『絵入本源氏物語考』（日本書誌学大系53 一九八七年 青裳堂書店刊）上巻p.三三三〜
- \*21 伊井春樹「源氏物語絵詞―場面の象徴化」（学燈社「国文学」特集絵で詠む源氏物語）二〇〇八年一月号所収）
- \*22 挿絵番号は、吉田『絵入源氏物語考』によった（注20参照）。

【表Ⅱ】 参考

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	巻番号	巻名	巻名の由来
花散里	榊	葵	花宴	紅葉賀	末摘花	若紫	夕顔	空蟬	榊木	桐壺			
歌	歌	歌	詞	詞	歌	歌	歌・詞	歌	歌	詞			
橘の香をなつかしみほと、きす花散里をたつてそとふ	乙女子かありと思へはさかきはたかもなつかしみとめてこそおれ 神垣はしるしの杉もなき物をいかにまかへて折さか木そ	はかりなき千尋のそのみるふさのおひ行すへはわれのみぞ見ん かざしける心多あだにおもほゆる八十氏人になべてあふひを	はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしのけふを得ける うき身世にやかてきえなはたつねでも草の原をもとはしや思ふ	いつれそと露のやとりをわかむまにおぎ、がはらに風もこそふけ 物をもふにたまふべくもあらぬ身の袖うらふりし心しりきや	なつかしき色ともなしになに、此末摘花を袖にふれけん	手につみていつしかも見ん紫の根にかよひける野辺の若草	よりてこそそれかとも見めたぞかれにほのぼのみつる花の夕顔	こ、ろあてにそれかとも見ゆ白露の光りそへたる夕顔のはな	うつせみのみをかへてけるこのとに猶人からのなつかしきかな	そのはらやふせ屋におふるは、木、のありとは見えあはぬ君かな	数ならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるは、き、	は、き、のころをふらしてそのはらのみちにあやなくまどひつる哉	いとなき初もとゆひの長さよを契るこ、ろはむすびそめつや
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	四三年	源氏物語提要	A群
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	五九年	孟津抄	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	六三年	繪入巻 源氏目案	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	六七年	湖月抄	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	六九年	源氏鬘鏡	B群
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	七五年	群花百 人一首	C群
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	八二年	源氏 絵尽	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	八九年	御家百 人一首	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	不明	秀玉百 人一首	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	不明	女大 宝箱	D群
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	不明	瀧草文庫 蔵劣夕	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	不明	文芸資料 蔵劣夕	

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12								
野分	篝火	常夏	螢	胡蝶	初音	玉鬘	少女	朝顔	薄雲	松風	絵合	閑屋	蓬生	滯標	明石	須磨								
詞	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌・詞	詞	歌・詞	歌	歌	歌・詞	歌・詞								
風さはきむら雲まよふ夕べにもわする、まなくはすられぬ君	行術なき空に立てよか、り火のたよりにたくふ煙ならぬは	か、り火にたちそふ恋の煙こそ世にはたえせぬほのほなりけれ	なてしこのとこなつかしき色を見はもとのかきねを人やとかめむ	鳴声も聞えぬ虫の思ひだに人のけつにはきゆる物かは	声はせて身をのみこかり螢こそいふよりまさる思ひなりけり	こてふにもこそはれなまし心ありて八重山ふきをへてとさりせは	花その、小蝶をさへや下草に秋まつ虫やうとく見るらむ	年月至松にひかれてふる人にけふ鶯の初音きかせよ	恋わたる身は玉かつうそれならていかなるすちをたつね来ぬらん	乙女子かかみさひぬらんあまつ袖ふるき世のともよはは経ぬれば	秋はて、霧のまかきむすほ、れあるかなきかに移る朝かは	見しおりの露わすられぬ種の花のさかりはすきやしぬらん	入日さす峯にたなひく薄雲は物思ふ袖に色ぞうつれる	身をかへてひとりかへれる山里に聞しに似たる松風ぞ吹	うきめ見し其のおりよりもけふはまた過にしかたにかへるなみだか	逢坂の閑やいかなるせきなればしけきなききの中をわくらん	たつねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもきもの心は	数ならで難波のこともかひなきに何身をつくし思ひぞめけん	身をつくし恋るしるしもこ、まてにめくり逢ぬるえにしふかしな	秋の夜の月けのこまよわかこふる雲井をかけれとよのまも見ん	ひとりねは君もしりぬやつれつれと思ひあかしのうらがなしさを	なけきつ、あかしのうらに朝霧のたつやと人をおもひやる哉	うきめかる伊勢をのあまを思ひやれもしほたるてふ須磨のうらにて	松じまのあまのたまやもいかならんすまのうら人しほまる、ころ
×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×								
×	×	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○								
×	×	○	○	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	○	×	○								
×	×	○	○	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	○	×	×								
○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×								
○	×	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×								
○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×								
○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×								
○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×								
○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×								
○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×								
○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×								

43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
紅梅	匂宮	幻	御法	夕霧	鈴虫	横笛	柏木	若葉下	若葉上	藤裏葉	梅枝	真木柱	藤袴	御幸
詞	詞	歌	歌	歌	歌	歌	歌	詞	歌・詞	詞	詞	歌	歌	歌
こゝろありて風にははすその、梅にまつくひすのとはすやあるべき	おほつかなたれにとはまし、いかにして初めもはてしらぬわか身を	大空にかよふまほろし夢にたに見えこぬ玉の行衛しらせよ (河海抄)	むすびをく契りは絶じ大方の残りすくなきみのりなりとも	山里の哀をぞふる夕霧に立出ん空もなき心ちして (河海抄)	たえぬへき御法なからもたまる、代々にごとむすふ中の契りを (河海抄)	心もて草のやどりをいとへども猶鈴むしの声ぞふりせぬ	大かたの秋をほうしと思へともふりすてかたき鈴虫の声 (河海抄)	横笛のしらへはことにかはらぬをむなしくなりし音こそせぬ (河海抄)	露しげき律の宿は古への秋にかはらぬ虫の声かな	いまはとでもえんけふりののすは、れたえぬおもひのなをやのこらん	柏木に葉守のかみはまさすとも人ならずへき宿の木すゑか	夕露に袖ぬらせとや日くらしのなくをき、つゝ、起て行らん	夕やみはみちたどく月まらてかへれわがせこそまにも見ん	小松原すゑのよはひにひかれてや野辺のわかなも千世をつむき (河海抄)
×	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○
×	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○
×	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○
×	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○
○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○
○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○
○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○
○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○
○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○
○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○
○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44					
夢の浮橋	手習	蜻蛉	浮舟	東屋	宿木	早蕨	総角	椎本	橋姫	竹川					
	詞	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌	歌・詞					
法法師尋ぬるみちをしるへにておもはぬ山にふみ迷ふ哉。此歌ゆへに此巻を法の師共名付る也	身をなげ返の河の早き瀬にしがらみかけて誰かどめしとありしより手習ひという詞巻の中に四方所あり。	ありと見て手にはとられず見れば又行衛もしらすきえしかけろふ	年ふともかはらん物か橋のこじまの崎にちぎる心は	橋の小崎かさきははらしを此うき舟を行衛しられぬ	さしとむるむくらやしけきあつまやのあまり程ふる雨で、きかな	かほとりの声もきしにかよふやどしけみをわけてけふ尋ぬる。此歌をとりて、此巻をかほとりともいへり	やとりきと思ひはてすは木のもとに旅ねもいかさひしからまし	此春は誰にか見せんなき人のかたみにつめる峯のさわび	ぬきもあへずもろき涙の玉の緒にながき契をいかむずばん	あけまきになかき契りをむすひこめおなし所によりもあひなん(細流抄)	立よらむかけと頼みし椎かもとむなし床になりける哉(河海抄)	一名優婆塞うはそくかをこなふやまの椎か本あなぞはくし床にしらねは	橋姫の心を汲て高瀬さす棹の雫に袖ぞ濡れぬる(河海抄)	竹川の夜をふかさしとせきしもいか成ふしを思ひをかまし	竹川のはしうちいでし一ふしにふかき心のそこは知りや
○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
×	×	○	×	○	○	×	○	○	×	○	○	○	×	×	○
○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○
×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	×	○
○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○
○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○
○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○
○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○
○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○

注

一、由来歌群の項で、歌の末尾に( )印を付したのは、本表で取り上げなかった古注釈のうち、当該歌を由来歌として認定した資料である。

一、歌の本文は、A〜D群の配列の中で、最も上欄にある○印の資料によった。

一、○×印は当該歌の有無を示すが、歌自体の本文異同については拘泥しなかった。

【表Ⅲ】

4夕顔	3空蟬	2榊木	1桐壺	巻序・巻名		画題		
				絵師・日本春正	数字は絵入源氏の挿絵番号。★は絵入源氏に無い挿絵。			
16 源氏の牛車、夕顔の宿に立ち寄る	★3 部屋から庭の木を眺める男性 ★2 堀・庭の木・蟬 ★1 松の幹にとまる蟬	★3 川の畔に立つ貴公子・草むら ★2 貴公子から部屋の様子を窺う貴公子 ★1 植物(榊木を描こうとしたものか)	★1 桐の花 5 元服儀式 4 高麗の相人、源氏を占う 1 源氏誕生により、更衣に曹司を賜う	不明	1650成・1660刊	源氏 綱目	A群 (場面絵資料)	
16	11		6	5	不明	1660刊		源氏 綱目
16	11	11		4	不明	1657刊		絵入源氏小鏡
16	15		7	1	師宣か	無刊記		源氏 鏡
	15		7	1	師宣 夢宣川	1660		源氏 鏡
	15	13		5	不明	1733		女大 宝箱
	15	10		5	英泉 漢齋	1812		源氏物 語絵尽
	15	7		1	英泉 漢齋	1836		秀玉百 人一首
	11	7		5	英泉 漢齋	1836		群花百 人一首
	15	10		1	豊歌 国川	～1864		源氏 絵物語
	★1	★1		★1	不明	1865	御家百 人一首	B群 (景物中心資料)
	★2	★2(11)		5	不明	不明	カルタ (文芸)	
	★3	★3		1	不明	不明	カルタ (繪翠)	
		文芸は11図の一部を取り上げたか。					備考	

9 葵	8 花宴	7 紅葉賀	6 末摘花	5 若紫	4 夕顔
★1 葵・流水	★4 桜の木の下に一人佇む貴公子 ★3 贇の子に立つて、桜を見上げる女性 ★2 台と盆 ★1 宮中での花宴、源氏舞をまう	★1 紅葉・天幕・雅楽器 39 源氏、宮中にて源内侍の装束を引く 36 源氏と頭中将、青海波を舞う 41 源氏、渡殿にて臘月夜と出会う	★3 庭に佇む女性 ★2 紅花・松の木・遠山 ★1 紅花 35 大輔命婦、末摘花からの衣装を源氏に届ける。 34 源氏、雪の朝末摘花の宿を出る 31 源氏、贇の子で末摘花の琴をきく	★3 野原に一人佇む貴公子 ★2 部屋に坐って、空を飛ぶ鳥（鶴か）を眺める貴公子 ★1 雀・鳥籠 28 源氏、北山の尼君を見舞う	★1 夕顔の侍女、門口で扇を手に惟光に手渡す ★2 夕顔の花 24 源氏、北山にて若紫を垣間見
44		39			
	43				24
		42			
	43				24
		★1			28
	43				28
		★1			★1
	43		41		★1
		★1			★1
	43		41		★1
		★1			★1
	43		41		★1
		★1			★1
	43		41		★1
		★1			★1
★1		★2			★2
		★3			★1
	★4		36		★1
		★1 (36)			★2
		★1 (36)			★1 (24)
			★3		★3

15 蓬生	14 滯標	13 明石	12 須磨	11 花散里	10 榊	9 葵
★1 葎 78 源氏、従者ら連れて蓬生の庭を分け入る	★3 海辺・牛車と従者 ★2 海辺・松・牛車 ★1 流水・植物	★3 一人で船に乗る男性 ★2 野原で遠山をながめ佇む男性 ★1 海・仕掛けられた網・月 70 馬に乗った源氏、月夜に海にむかい都を思う	★2 海辺に佇む男性 ★1 海・松の木 67 源氏一行、船で明石に渡る 68 源氏、明石入道と合奏	★3 部屋から庭の木を眺める男性 ★2 簀の子に坐って、外を眺める男性。空には白い鳥。 ★1 村里の景色 57 源氏、麗景殿女御と昔話をする。	★2 鳥居・榊葉 ★1 野宮を訪れ、鳥居をくぐる源氏 55 源氏、頭中将郎に招かれる	★2 葵の群生する池の畔に佇む牛車 ★3 葵の群生する池の畔に行む貴公子
78	74	68	63	57	55	
78	74	70	63	57		49
78	74		63	57		49
78	74		63	57		49
78	74	70	63	57		49
78	74	70	63	57		49
78	74		63	57		49
78	74		63	57		49
78	74	70	63	57	★1 (49)	
78	74	70	63	57		49
★1	★1	★1	★1	★1	★2 (49)	
	★2 (74)	★2	★2 (63)	★2	★1 (49)	★2
	★3 (74)	★3 (67)	★2 (63)	★3	★1 (49)	★3
		秀玉は構図の一部のみを採用する傾向がある		絵物語、部屋に女御、源氏は實の子に立つ 群花も構図の一部のみを採用		









41 幻	40 御法	39 夕霧	38 鈴虫	37 横笛	36 柏木
159 源氏、簀の子にすわり空行く雁を眺める	★4 部屋で読経する僧侶 ★3 部屋に置かれた経典と厨子 ★2 活けられた仏花 1 部屋から梅の木を眺める女君(紫上か)と少年	★3 民家・鹿・野原 ★2 夕暮れの野原に立つ男性 ★1 夜空を飛ぶ雁	★3 野原に立つ男性 ★2 部屋から庭の薄を眺める男性 ★1 草花と流水	★3 部屋で横笛を吹く男性 ★2 横笛とそれを入れる袋 ★1 夕霧(横笛)、落葉宮(琴)を合奏	★3 部屋から柏の木を見る男性 ★2 柏 ★1 渡廊下で、扇を手にした男女が寄り添う(花宴か)
158 葵を手にした源氏、中将の君と歌を読み交わす	155 仏前に法華經千部、僧たちの行道	152 妻戸のもとに立ち、小野里の夕暮れを眺める夕霧。鹿の囀	148 持仏像の前に入道宮、戸口で琴を手に、秋の庭を眺める源氏	145 齒の生え始めた薫、 146 故柏木の夢をみる夕霧	
	155	152	148	145	
159	155	149	148	★1	
159	155	149	148	★1	
159	155	152	148	146	
159	155	152	148	★1	
159	155	152	148	★1	
159	155	149	148	145	
	★1 ★1	152	148	145	★1
	★2 (155)	★1	★1	★2	★2
	★3 (155)	★2 (152)	★2	★3	★2
159	★4 (155)	★3 (152)	★3	★3	★3
	群花は行道よりは壇前、読経する僧を描く				絵物語 花宴と混同か



50 東屋	49 宿木	48 早蕨	47 絵角	46 椎本
★1 匂宮、偶然浮舟をみつけ、裳裾をpushさえて言い寄る	★2 宿り木の傍らに立つ男性 ★1 宿り木 ★1 宿り木	★3 野原に立つ男性 ★3 春の野山か ★2 蕨・龍 ★1 春、衣裳を手にする女性たち。衣替えか	★4 部屋から庭の木を見る男性 ★2 實の子近くに座り、部屋の奥を見る男性 ★1 あげまき	★4 椎の本陰に立つ男性 ★3 實の子に座って外を見る女性 ★2 椎の木 ★1 姫君の許に、山の阿闍梨より炭が届く 176 大君と中君の合奏中、薫が訪ねる
197 浮舟、楽人と共に琴を合奏 202 實の子に座る薫、部屋には浮舟と弁尼ら	188 帝の前に菘盤、菊を手に参上した薫、帝と歌を詠み交わす 193 弁尼を訪ねた薫、宿木を見て歌を詠み交わす	185 阿闍梨より届いた菘籠を前に、文をひらげ見る中の君	180 匂宮と中の君、部屋より宇治川を眺めやる 181 宇治川で匂宮、公達らと船遊び	172 薫、公達らを誘い、船で宇治川をわたり八宮の許に向かう 176 薫、故八宮の居間で故人をしのぶ
	197			
			185	172
202			185	★1
202	193		185	176
202	193		185	176
202	193		185	176
202	193		185	176
202	193		185	176
		188	185	★1
★1		188	★1	168
	★1		★2 (183)	
	★2 (183)	★3	★2	★3
	★2 (183)	★4	★3	★4
罪作福僧と、秋大行、或いは福貞の圖を写すとある				絵物語 橋姫168と混同か



一 桐壺



二 はく木



三 うつせみ



四 夕かほ





七 紅葉の賀



五 若むらさき



八 花のえん



六 末つむ花

九 あふひ



十 さかき



十一 花ちる里



十二 すま

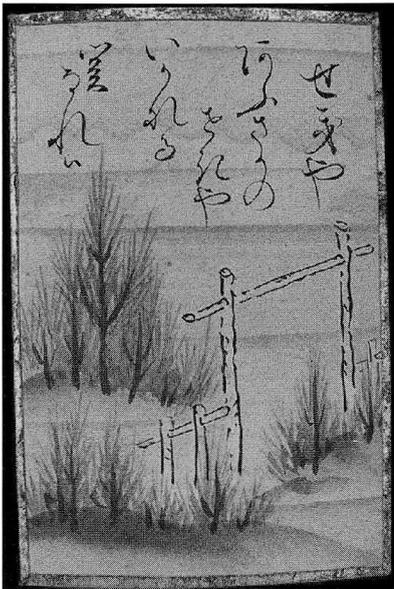




十五 よもきふ



十三 明石



十六 せきや



十四 みをつくし



十九 うす雲



十七 繪合



二十 朝かほ



十八 松風



二十三 はつ音



二十一 乙女



二十四 こてふ



二十二 玉かつら



二十七 かゝり火



二十五 螢



二十八 野わき



二十六 とこなつ



三十一 真木柱



二十九 みゆき



三十二 梅かえ



三十 藤はかま

三十三 藤のうら葉



三十四 若菜 (若菜上)



三十五 わかな (若菜下)



三十六 かしは木





三十九 夕霧



三十七 横笛



四十 御法



三十八 すゝむし



四十三 紅梅



四十一 まほろし



四十四 竹川



四十二 匂みや



四十七 あけまき



四十五 はしひめ



四十八 さはらひ



四十六 しめかもと



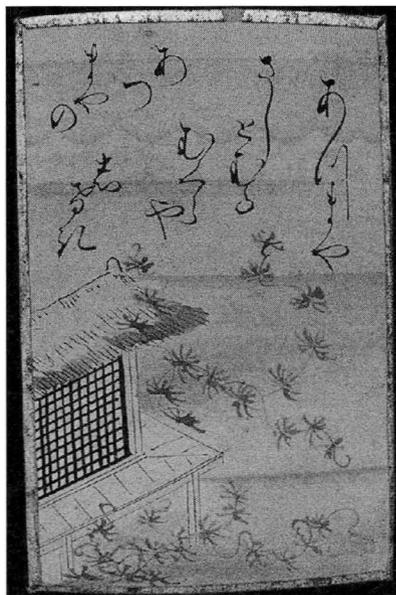
五十一 うき舟



四十九 やとり木



五十二 かけろふ



五十 あつまや



五十三 手習



五十四 夢のうき橋

(注) 上の句の写真のみを掲載し、下の句は省略した。